

「日本語と日本文学」1号～22号掲載論文一覧

* 1、3、4、9号以外は残部がございます。入手御希望の方は編集委員会までお申し込みください（費用についてはお問い合わせください）。

◎ 1号（昭和56年6月）

- 「くに」の語源 馬 淵 和 夫
「聖家族」試解 西 原 千 博
山上憶良嘉摩三部作の成立 岡 内 弘 子
——「紅の面の上に」を中心として——
記録体における形式名詞「由」 小 川 栄 一
同音語の用法——「温かい」と「暖かい」—— 吉 村 弓 子
西尾実国語教育論の探求 桑 原 隆
——島木赤彦の教育論との関係について——
日・タイ語のテンスとアスペクトの対照および教授法に関する一考察
ラッチャニー・ピヤマーワディー

◎ 2号（昭和57年11月）

- 一つの読み 伊 藤 博
——遺新羅使人たちの悲別贈答歌について——
源経信と遁世者 仁 平 恭 治
——『撰集抄』における経信像——
「小チャイ」考 吉 見 孝 夫
「水が飲みたい」・「水を飲みたい」式表現の用法差 小 川 栄 一
——室町期の状態——
語頭の位置にある否定的な意味をもつ造語要素「無・不・未・非」の意味と使われ方
サトー・アメリカ、川崎晶子、ソーニア・ロンギ
日本語・マレーシア語におけるヴォイスの比較対照研究
——日本語教育の立場から—— 加 納 千 恵 子

◎ 3号（昭和58年11月）

- 日本語文化をになった人の、ある系列 林 四 郎
斎藤茂吉「おひろ」の連作 小 倉 真 理 子
——「死にたまふ母」との関連から——
『多武峯少将物語』考 下 西 善 三 郎
——高光の作中呼称と作者のめざしたもの——
情態修飾成分の整理 矢 澤 眞 人
——被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察——

複合動詞の意味と構成 ——「～ダス」・「～アゲル」を中心に——	田 辺 和 子
国語教材論研究の課題と方法	桑 原 隆
◎ 4号 (昭和59年12月)	
新撰万葉集と菅原道真	山 崎 健 司
——上巻における和歌と漢詩の或る場合——	
玉鬘十帖の方法と成立	川 島 絹 江
——玉鬘の運命と和泉式部, そして妍子——	
コナタ・ソナタと述部待遇語句の呼応	伊 坂 淳 一
——狂言台本とキリシタン文献を総合する観点から——	
文雑考——国語教育への展望とともに——	湊 吉 正
問答文における主語のあらわれ方	小 口 叔 枝
表現型とアスペクト	青 山 文 啓
◎ 5号 (昭和60年11月)	
比喩文における語の相互関連度の測定	芳 賀 純
——隠喩と直喩の比較——	
七夕独詠歌論——大伴家持の漢詩文受容——	田 中 大 士
『虞美人草』論——詩人・小野の造型——	橋 川 俊 樹
版本狂言記の「おりやる」と「おぢやる」	大 倉 浩
——詞章整理のあとづけ——	
日本語「スル」動詞と韓国語「hada」動詞の対照的研究	李 光 秀
漢字基底語の現代における位置	吉 村 弓 子
文学教育における主題指導の有効性 (上)	高 木 まさき
◎ 6号 (昭和61年11月)	
〈寺〉を持つ作品群——明治三十九年の漱石——	平 岡 敏 夫
汗瑞能振の訓	鈴 木 武 晴
紀貫之の季節観	加 藤 幸 一
三島作品における〈妹〉	小 林 和 子
助動詞の語形変化と活用形	坪 井 美 樹
——中世後期を中心として——	
池袋児童の村小学校における峰地光重の綴方教育	山 本 茂 喜
談話におけるトピックの転換と一貫性について	堀 越 喜 晴
——手話の談話分析を通して——	
取立て助詞「ダケ・バカリ・シカ」の一考察	呉 雅 琴
——中国語の副詞「只」との対照——	
◎ 7号 (昭和62年6月)	
「行ふ尼なりけり」考 ——その文構造と意味——	北 原 保 雄

- 和泉式部日記の「をかし」をめぐって
『雪国』論
——島村と駒子の関係を中心に——
『人間失格』論
——「手記」と「あとがき」の〈時のしくみ〉をめぐって——
日本語文における〈再帰性〉について
——構文論的概念としての有効性の再検討——
説明付加型の連文の構造と機能
伝統修辞学と古典修辞学
——アメリカのインベンションにみられる伝統修辞学の影響——
- ◎8号（昭和63年1月）
- 下総犬と三浦犬
——『古今著聞集』の三浦義村・千葉胤綱口論の説話をめぐって——
総題を掲げる歌群
——大伴家持論序説——
「和泉式部百首」考
——恋部を中心に——
「羅生門」再読
古典作品における要求表現の諸形式
——命令形＋終助詞の各形式について——
名詞の意味的特徴
——形容詞から派生した名詞の意味的特徴から——
説明的文章の読解指導論
——認知的側面からみた形式主義・内容主義の検討——
- ◎9号（昭和63年9月）
- 「日本語と英語のモダリティに関する計量言語学的対照分析」
源氏物語の中における朗詠と歌謡
近世中期勸化本と草双紙
——その影響関係について——
ある三島由紀夫像
——〈菊田次郎もの〉をめぐって——
日本語における受動文の意味的特徴
——漢語動詞を対象にして——
国語教育における読者論の射程
- ◎10号（昭和63年12月）
- 川端康成『千羽鶴』における人称詞
世阿弥自筆能本における登場人物の役表記をめぐって
- 前橋 均
申 礼 淑
三 谷 憲 正
天 野 みどり
土 井 真 美
柳 沢 浩 哉
森 野 宗 明
朝比奈 英 夫
小 林 恵
高 木 まさき
柴 田 敏
堀 誉子美
寺 井 正 憲
草 薙 裕
青 柳 隆 志
山 下 琢 巳
小 埜 裕 二
李 成 圭
上 谷 順三郎
相 原 林 司
飯 塚 恵理人

有間皇子自傷歌二首	三 田 誠 司
「ひかりの素足」から「銀河鉄道の夜」へ	横 山 明 弘
——宮沢賢治における地獄を中心に——	
取り立て助詞「ハ」の対比の条件	市 川 保 子
——「花子がコップは割った。」は何故おかしいか——	
疑似命令文	山 岡 政 紀
——日本語モダリティの文法化の一事例——	
学校教育における話しことば教育の存立	安 直 哉
——教育課程全体へ融合した指導の有効性——	
◎11号（平成元年6月）	
大正初期の随意選題の状況	高 森 邦 明
——保科孝一の紹介と諸家の実践——	
『とはずがたり』後篇の起筆	寺 島 恒 世
——巻四冒頭部の意味と機能——	
小学館本『住吉物語』の本文の素性	岡 崎 和 彦
大鏡の待遇表現の考察	金 仁 珠
——待遇主体の評価的態度をめぐって——	
主題省略の再生メカニズムにおける日本人と外国人日本語学習者の相違	平 川 八 尋
現代日本語における「話題主」と「聞き手」の上下関係が話し手の敬語表現に及ぼす影響	鄭 惠 卿
◎12号（平成2年2月）	
出版取締りと西鶴の方向転換	谷 脇 理 史
——『好色一代女』の危険度——	
没理想論争における鷗外とE.V.ハルトマン	坂 井 健
「蜃気楼」の構造——風景の構図から——	単 援 朝
ソシュールの記号学にみられる二つのアспект	戸 田 功
——国語教育学における文化論的視座として——	
韓国・日本漢字音における重韻の問題	黄 光 吉
韓国人の日本語学習者の音声教育に関する研究	李 炯 宰
——発音および聞き取り上の問題点を中心に——	
◎13号（平成2年10月）	
『大鏡』兼通伝・兼家伝を読む	桑 原 博 史
謡曲『嫉捨』における老女と月と	金 忠 永
——本説の検討を通しての本曲の主題の解釈をめぐって——	
〈終了〉の意味と自他の形態	須 賀 一 好
——他動詞形用法に接近した自動詞形用法の分析——	

『譬え』による議論の修辞学的分析	香 西 秀 信
比喩の意味における喩辞と被喩辞の相互関係について	李 徳 奉
場所的存在の表現をめぐって	阿 部 博 幸

——日・英・中の比較による‘場所的存在’と‘所有’‘所在’との関係——

◎14号 (平成3年2月)

「とはずがたり」の時代と人物	河 北 騰
『伏屋の物語』と『住吉物語』	岡 崎 和 彦
——明応本の改作をめぐって——	
山岸荷葉の一人称小説	早 川 美由紀
——子供の視点の発見——	
顕現していない格成分の解釈について	高 本 條 治
——連文における解釈の場合——	
生産物および用具に関する基本語彙の対照	高 田 誠
物語文のテキストにおける内容と述語形態とのかかわり	
——『蜘蛛の糸』を中心に——	野 村 美穂子

◎15号 (平成3年12月)

『平家物語』の本文批判	小 西 甚 一
——水平伝承と垂直伝承——	
平安朝の朗詠常用曲	青 柳 隆 志
読みにおける子どもの脈絡と大人の脈絡	高 木 まさき
複合名詞のアクセント	崔 聖 玉
——N1、N2がともに2拍以下の場合——	
韓国人の日本語学習者の誤りの評価	趙 南 星
——日本語話者と韓国語話者による誤りの重み付け——	

◎16号 (平成4年2月)

観念としての「理想(想)」	坂 井 健
——鷗外「審美論」における訳語を中心に——	
谷崎潤一郎「女人神聖」論	西 莊 保
——「女人」をめぐって——	
自他対応の意味的類型	三 井 正 孝
「白いぼうし」試論——あいまいさの構造——	山 本 茂 喜
正義原則と類似からの議論	香 西 秀 信
日本語における長音節の形成とその歴史的意味	高 山 知 明
——とくに和語の促音、撥音について——	
程度副詞の体言修飾について	張 麗 群
情報の縄張から見た対話の構造	中 園 篤 典
——聞き手の相づちを中心に——	

◎17号 (平成4年9月)

江戸中期における〈熊野の本地〉の継承と断絶

山下 琢 巳

——黒本・青本『五衰殿熊野本地』と勸化本『熊野権現靈驗記』をめぐって——

防人検校時の家持歌

阿部 りか

『奔馬』論

許 昊

——「神風連史話」を中心に——

古典教育の意義に関する一考察

浅田 孝 紀

アメリカの作文教育におけるコンピュータ教育の可能性

入部 明 子

モダリティという観点から見た「ようだ」と「らしい」の違い

金 東 郁

韓国人学習者の日本語の丁寧表現に見られる韻律的特徴

洪 珉 杓

状態表現の「ル」形と「タ」形

牟 世 鐘

——両形式の意味とその近似性——

◎18号 (平成5年8月)

『守覚法親王百首』本文考

千草 聡

話者自身の経験に対して使われた〈けむ〉について

宮 武 利 江

大学の講義における接続の表現

金久保 紀 子

日本語と韓国語の漢語動詞

辛 碩 基

外来語音と現代日本語音韻体系

松 崎 寛

助詞を省略した文における発話時間とピッチの特徴

守 時 なぎさ

蘆田恵之助『綴り方教授法』に関する史的考究

渡 部 洋一郎

——指導理論の実際とドイツ作文修辭法・四階級説の系譜——

◎19号 (平成5年10月)

『雲母集』の「新生・序歌」に関する一考察

小 倉 真理子

『行人』論

稲 垣 政 行

——一郎の発見、そして一郎の求めた世界へ——

『檜垣』の老女をめぐって

金 忠 永

——「水を汲む」所作から捉えられるシテ像の考察——

『朗詠要抄 因空本』考

青 柳 隆 志

山上憶良の表現の独自性

村 田 カンナ

——「うちなびき こやしぬれ」をめぐって——

いわゆる形式名詞に関わるモダリティ

金 玉 任

——ノダを中心に——

アスペクトと局面動詞

呉 鐘 烈

逆接のレトリック

香 西 秀 信

◎20号 (平成6年9月)

建暦・建保前半の藤原家隆の一面

名 子 喜久雄

——「内大臣家百首」・「内裏名所百首」を中心として——

『鎌倉大草紙』から御物絵巻『をくり』へ ——小栗譚の発生と形成——	木村 晃子
吉野における讃歌の継承 家持の「感旧之意」 ——池主に贈るほととぎすの歌——	遠山 一郎 西 一夫
漱石「方丈記小論」私注（一） 名詞性をもつモダリティの不定形式について 言語の指導を中心とした国語教育 ——言語教育からみた生徒の理解力・表現力の育成について——	下西 善三郎 加藤 陽子 河原塚 努
読みの正当性を支える根拠 ——ジャック・デリダに見る読みの実践——	松本 修
◎21号（平成7年6月）	
飛鳥川の淵瀬 ——古今集九三三番歌の成立と受容——	杉浦 清志
『新勅撰和歌集』と後鳥羽院 ——雑歌を中心として——	永田 初枝
日本語のヴォイスの体系とプロトタイプ 単独形式化モダリティ 疑問表現における「の」の機能の一側面 ——前提との関わりを中心に——	佐藤 琢三 金 東郁 牧原 功
転換を表す接続詞「さて」「ところで」「では」をめぐって ハズダの意味と用法	甲田 直美 田村 直子
◎22号（平成8年2月）	
『日本永代蔵』の神仏の表現と教訓性について 『枕草子』における「いふべきにもあらず」 ——メタレベルに現れる清少納言の表現意識——	石塚 修 若杉 俊明
「おぼゆ」考 ——『源氏物語』を中心に——	柳 椿姫
日本語と中国語の第三者敬語における「親」・「疎」の働きの比較対照 ——日本人と中国人大学生の言語調査を中心に——	郭 俊海
「タメニ」の意味表出と構文的特徴 ——複文に見られる時間関係と意志性について——	于 日平
現代日本語での「の」と撥音の交替 ——音声上の特徴から見た撥音形の容認性に関する一傾向——	那須 昭夫
辞的成分と共起する副詞の計量的研究	小池 康